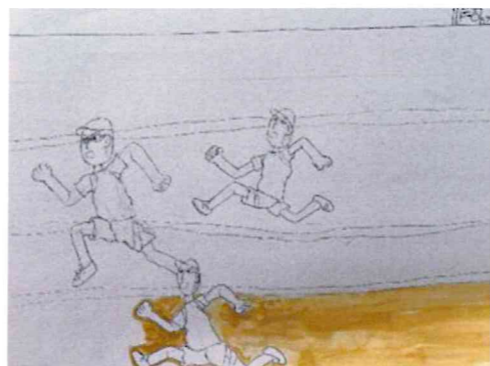


■「田植えの絵 その後」

片山 直人（北上市立江釣子小学校）

昨年の全国大会で実践発表した「手で植えた苗」を描いた5年生の子どもたちが、学んだことを生かしながらか秋には「稲刈り」の絵を描き、春に描いた絵と比較し、色合いの違いを感じたり、自分たちの成長を確かめたりしました。また、今年度、6年生になったその子たちと「最高の運動会にしよう」と取り組んだ運動会の一場面を描きました。自分が運動会で最も輝いていた場面を選び、その頑張りや思いを描くために、表情や構図をどう工夫したらいいか、みんなで交流しながら考えて描きました。



■「知的障がい者の半生をLLブック（誰にでも読みやすい本）で表現して交流」

久語 民雄（大阪商業大学高等学校）

高校生が知的障がい者（以後、当事者）の半生を知り、それを誰にも読みやすいように、イラスト、簡略な文章、シンボル（絵文字など）で表現した冊子（LLブック）を制作しました。普段の生活で交流機会のない当事者の辛く厳しい半生を記録映像などで知り、その過去と心情をイメージし、表現する難しさに悩み、喜んで貰えるために試行錯誤を繰り返して4ページの冊子を制作して当事者へプレゼント。交流を通して当事者への思いが変わりました。



■「5年生の絵画」

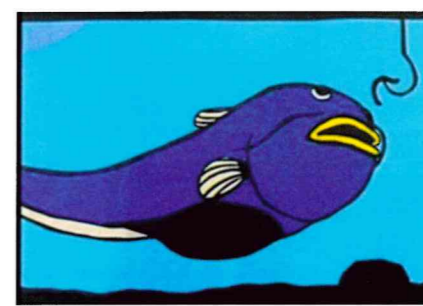
岸上三重（大阪美術教育の会）

今年は、生まれて初めて5年生を担当しています。低学年や中学年のように2時間続きの図工の時間が取れず、図工の時間を確保するのに苦労しています。そんな中で描いた「なんちゃって風景画」「自画像」などの作品を紹介します。高学年の図工で大切なこと、指導のポイントなどご指導いただけたら幸いです。

■「不登校の生徒に向き合い、学ぶ美術指導」

田口 淳子（星槎学園湘南校 講師）

星槎学園は不登校気味の生徒が高卒の資格を得ることができる学校。選択ゼミという形の美術指導。絵が好きな生徒が選択しフリースクールの中生も一緒に学んでいる。生徒の多くは軽度発達障がいがあり、生きづらさを抱えている。個々の障がいの特徴や習熟度に配慮しながら自身の満足感と他からの評価に自信を持てるような教材や進め方を工夫している。好きな事から社会に出て前向きな姿勢で学んでいってほしいと思っている。



■「ずこうなにするん？友だちとだからできること～楽しみや自信がもてる活動へ～」

玉置 美里（奈良県立大淀養護学校）

昨年度、肢体不自由校小学部5、6年生グループの図工の授業の様子です。いろいろな実態の子ども達。クラスの先生方と連携しながら図工の授業を通して楽しいなあとか、やってみようかなあとという思いを引き出すにはどうしたらいいのかと考えて授業をしてきました。「ずこうなにするん？」はある子どもから出た言葉です。この言葉の意味とは？1年間で取り組んだ題材の紹介と、子ども達の様子をお話できたらと思っています。



■「旅の話を想像して色と形で創造する—10年間の実践例—」

藤原 初代（八王子市立小学校特別支援学級図工）

「図工は色と形で考える教科」で「手を使って物を創り出す学習」は「人間の子どものため」のために一番に必要な教科であるという信念をもって実践してきました。

特別支援学級の児童達にはやりたいという意欲をもたせることが最重要です。

「冒険・探検のシリーズ」では次々とお話しが続いていきます。子供達が楽しく想像しながら作品に創造していく「造形活動の旅」です。空・地下・森・島・深海と旅は続きます。

これまでの10年間の実践例を紹介します。

